

環境福祉学会

News Letter

ニュースレター ● NOVEMBER 2007

6

目次

見つけよう名古屋で！	1
年次大会分科会場・内容	2
第7回事例研究会概要	3
第7回事例研究会概要	4
第8回事例研究会概要	6
第8回事例研究会概要	7
年次大会会場案内	8
組織及び役員一覧・事務局だより	8

環境福祉学会 事務局 東京都港区南麻布5-16-6 コウセイ広尾3F
創造学園大学 東京本部内
TEL.03-3447-3321 FAX.03-3447-3681
<http://www.kankyofukushi.jp>
E-mail: info@kankyofukushi.jp

見つけよう名古屋で！

「環境福祉のまちづくり」

環境福祉学会第3回年次大会が、「環境福祉のまちづくり」を大会テーマに、11月24日(土)・25日(日)、名古屋市で開催されます。研究発表は22題(詳細は2頁に掲載)予定されております。

名古屋産業大学、中部電力、中京地区の大学、企業、福祉団体、NPO、地元自治体の協力で、大会の準備がされております。見つけよう名古屋で！を合言葉に、多数の学会員及び一般市民の参加で大会を成功させましょう。

開催概要

大会テーマ：「環境福祉の理論と実践」--環境福祉のまちづくり--

日時：平成19年11月24日(土)～25日(日)

会場：中部電力 東桜会館

スケジュール：第1日 24日(土)

12:30 受付

13:30 公開シンポジウム・基調講演・基調報告

14:50 パネルディスカッション「環境福祉とまちづくり」

16:40 第3回総会

17:30 懇親会

第2日 25日(日)

9:00 受付

9:15 一般研究発表会(3会場 22研究発表予定)

12:30 午前の部終了(ワイルドフラワーガーデンで昼食)

13:00 エクスカーション(先着40名)

17:00 終了解散

参加費用：大会参加費 4,000円 (学生2,000円)

懇親会参加費 4,000円 (学生2,000円)

エクスカーション 2,000円 (バス代と昼食込み)

第3回年次大会研究発表会場・内容

第1会場

環境福祉の理論的研究、環境と福祉の融合の取組み、環境福祉のまちづくり等

看護学校における環境体験学習

* 木呂子 豊彦（岐阜大学工学部・客員教授） / 水上 精栄（岐阜大学工学部・技術室長）

使用済み自動車のシートを活用した高齢者向け福祉機器の開発 ~ 脚運動支援機能付き椅子・車椅子の作製 ~

獅々堀 彊（香川県立保健医療大学保健医療学部教養部）

吸水紐を用いた植物の簡易栽培法によるテラス・屋上緑化 ~ 1. 栽培法と癒し効果の検討 ~

* 永井 伸一（獨協中・高） / 榊田 正治（岡山大学） / 安原 稔（南国興産）

ピクトグラム導入による福祉環境の改善

本多 浩（職業能力開発総合大学校 / 能力開発研究センター）

パブリックトイレにおける子育てバリアフリー ~ 学生によるアンケート調査より ~

* 寺田清美（東京成徳短期大学）村上ヤチヨ（早稲田大学人間総合研究センター）

「健康都市の取組み」 ~ 人の健康とまちの健康の融合 ~

白井 武男（愛知県尾張旭市役所 秘書広報課 健康都市推進室）

化学物質による環境汚染を削減するために ~ 市民主導型リスクコミュニケーション（PART2） ~

中村 豊子（環境リスク研究会）

住まいと暮らしと環境福祉

金井 ユキエ（社団法人 コミュニティネットワーク協会）

第2会場

福祉に対する環境の活用

障がい者と環境 ~ 就労と生活 太陽の家の経験から ~

* 中村 太郎（社会福祉法人太陽の家） / 小田 博道（社会福祉法人太陽の家）

奈良県「植村牧場」における知的障害者雇用の取組み

大澤 史伸（名古屋学院大学）

農の力を活用した地域福祉の展開

宮秋 道男（日本社会事業大学博士前期課程 / NPO法人くるめ・一歩の会）

ゴルフ場と福祉を融合した環境福祉の実践

伊藤 滋之・宮木 清・中村 隆義・久保 征生（社会福祉法人正寿会）

中間 敏男・松生名 保哉・松田 恭二・高橋 律

不登校問題と環境福祉 ~ 発達障害児の地域教育環境問題 ~

* 西岡 弥生（創造学園大学・こころと生活の相談室） / 石川 瞭子（創造学園大学ソーシャルワーク学部）

不登校問題と環境福祉 ~ 発達障害児の生活環境としての家族問題 ~

* 新井 真理子（創造学園大学・こころと生活の相談室） / 石川 瞭子（創造学園大学ソーシャルワーク学部）

「幼児期における環境教育」の取組みと実践

* 一ノ瀬 美奈（青葉桐の花保育園） / 池田 紘子（青葉保育園） / 飯田 正朔（大和保育所）

第3会場

環境福祉に関する技術の産業等への活用

循環型社会実現に向けて地域の役割(第2報)

伊澤 敏彦（特定非営利活動法人 環境資源開発研究所）

バイオマス資源の循環処理技術を用いたウッドセラミックスの開発 ~ 知的障害者が取り組むリング創作炭 ~

岡部 敏弘（青森県工業総合研究センター）

環境共生技術の建築への採用と、福祉施設における事例

村田 昌樹（オーエムソーラー協会）

「エムプラス【M+】」ナチュラルインフィル技術 ~ 子供に配慮した室内環境づくり ~

* 田中 裕貴（飛鳥建設株式会社） / 船橋 幸嗣（飛鳥建設株式会社）

環境事業の理想と現実

猪野 栄一（株式会社 オプティ）

新しい働き方＝協同労働と新しい福祉社会の創造 ~ 市民主体の新しい公共とまちづくり・仕事おこし ~

古村 伸宏（日本労働者協同組合連合会）

「知的障害者の雇用から得た、ビルメンテナンス業における園芸福祉活動」

福田 久美子（株式会社 美交工業）

「赤ちゃんとのふれあい授業の重要性
—高校生・大学生による子育て福祉環境調査からの提案—」

東京成徳短期大学教授
寺田 清美氏

本日お話ししたいことですが、「あかちゃんとのふれあい授業」からの学びは、机上からではなく実践からであるということ、それから一人で子育てをする孤立の子育ての環境の現状、少子化が進行しているというのはどういうことか、それから子育ての福祉環境調査からの提案みたいなことを少しお話しさせていただきたいと思います。

私は長いこと幼い子どもたちに接してきておりますが、実際に目で見て、砂や土や雨の匂いや風を体感した子と、そうでない子とでは、発想力が違います。いわゆる五感を感じられる子と、そうでない子で、言ってみれば当たり前のことかもしれませんが、大きく違ってくる。

たとえば同じ年齢のクラスで、1年間トータルで散歩に行った回数が多い保育園と、回数が少ない保育園では、発語量が大幅に違います、理解力も、表現力、絵を描く力も違ってきます。脳が活性化されているか、いないかということが違う。自分の目で見て確かめることがものすごく大事なわけです。そして2歳から3歳のとき、自我が目覚めてくる時期ですが、自分がやりたい、やりたくない、やりたいけれどもいまはがまんしなければいけないといった葛藤体験をした子と、しない子では、トラブルに対する対応も変わってくる。

子育ての地域力がとても低下してきて、より具体的な援助が求められているというのが、厚生労働省の委託研究でも表れています。4分の1の母親は、子育ての悩みをだれにも相談できないまま、子育てをしている。4割の母親は、困ったときにどなたにも子どもを預けられない。そういう不安を抱えている。そして、子どもを叱ってくれる人は約半分しかいない。都会だと、もっと少ないのではないのでしょうか。こういう現状があります。

昔なら、地域ごとに子どもを見守っていくとか、お互いがお互いを見合うような環境があったと思いますが、いまはその環境がほとんどない状態です。子どもとのかかわりが苦手なお母さんを調査していくと、ゲーム遊びやテレビを重視しがちになっていますが、それがますます子どもたちのコミュニケーション能力を希



寺田 清美氏

薄化するといった現状につながっているのではないかと思います。

近所同士、お互いが見合っていく、支え合っていく、あるいは一声かけていく、そういう子育てにやさしい環境やまちを意図的につくっていかねばいけない時期にきているのかなと思います。

65%の子どもたちが日常生活の中であかちゃんと交流する機会がないと文科省の調査で出てきているわけですが、さらに1歳半検診で89.1%の母親が、わが子で初めてあかちゃんを抱く、お世話をする、そして虐待されて殺められてしまう子どもたちの中の44%が0歳児です。こういう現状があります。その中でも、6カ月未満の子が約7割です。6カ月未満といたら、たいがいお腹がいっぱいで睡眠が足りていればよくて、泣くのは当たり前です。ところが、なぜ泣くのか理由がわからなくて殺められてしまう。そういう現状があるなら、幼いとき、小学生、中学生、高校生のときから、あかちゃんと出会って、ふれあう機会を大人が設定していく必要があるのではないかと、私は考えたわけです。

研究の結果ですが、このように地域にはバリアがあって、改善点が見えてきました。高校生と大学生はそれぞれ視点が違いますが、高校生と大学生が実感したバリアの比較です。

大学生が11回、高校生が8回感じたわけです。高校生と大学生、それぞれ感じていますが、道路のつくりにはバリアがあると感じた大学生が30%に対して高校生は67%、それに対して緑や花が植えられるといいということが、高校生よりも大学生のほうが感じているといった結果が出てきました。

乳児の特徴についての気づきとか、いろいろな意見をKJ法にまとめたものを分類してみると、かわっ

て初めてうれしいと感じるとか、かかわって初めて大変さを感じるとか、情動的な経験、それから自分自身について振り返るとか、乳児の特徴について知るといったことを学んでいます。

結局、乳児にとって発達が保証される環境地域とは、親にとってバリアが少なく安全性が保証されていることが大事だということとか、それからだれしも心の中にあるバリアの意識のハードルを低くしていくことが大事なのではないか。子育てバリアフリーの推進には、整備や機器、造作といったハード面にとどまらず、人間同士のかかわりを促すようなソフト面への配慮の重要性がさらに高まる必要があると感じています。

今後の課題ですが、子どもの心の育ちを応援してくださる世界各国の企業とともに、環境と福祉を考えて、そして新しい環境福祉学を創設していくことが大事かなと思います。

未就学児のお子様を持つ高層マンションに住んでいる方で4階以上と以下に住んでいる方、それと一戸建に住んでいる方を比べた場合、明らかに子どもの体力や発語力が違います。

平屋や4階以下のお母さんとお父さんは、外に出る機会が多い。つまり子どもにとってやさしい環境や、生活弱者といわれる方にとっての環境、まちづくりの視点をどこに置くかということは、とても重要な課題ではないかと思っています。



「環境が子どもを育てる」

財団法人休暇村協会理事長
炭谷 茂氏

近年、子どもの非行が大変多く、だんだん低年齢化しており、かつ狂暴化している。これは日本だけではなく、先進国共通の現象だろうと思います。

いじめや不登校も増えている。いじめについては去年は大変な問題になりました。不登校もあいかわらず多い。それから、少し大人になると引きこもりも大きい数になっている。さらに児童虐待の問題があり、これについていえば3万件以上の相談が児童相談所に対してあります。

去年の11月に京都大学の教育学部の准教授の木原先生が発表されたいじめについての調査が、読んで大変おもしろかった。実態調査ですが、いじめをしている側、いじめをされている側、両方の高校生を調べていま

した。いじめをする側もされる側も、共通していることがある。何かというと、みんな友達が少なく孤立をしている。不登校にしても、引きこもりにしても、同じく孤立をしている状況だと思います。ということは、このように子どもをめぐる状況は、日本の場合、孤立ということが共通しているのではないかと考えています。

それとともに、孤立というものと心の歪みというのが、どういう相関関係にあるのか。原因であり結果なのか、どちらが原因でどちらが結果なのか、よくわかりませんが、子どもたちの心の歪みやひずみといったものが現在生じてきているのではないかと、というのが私の仮説です。

そういう問題意識を持ちながら、それをもたらしているものの原因の一つとして自然環境や社会環境との関係というものを追求してみる価値があるのではないかと、というのが、私の問題設定です。

そして、子どもたちの自然環境へのふれあいの減少が、心の歪みにかなり影響を与えているのではないかと。一方、自然環境へのふれあいが少なくなった裏腹には、この子どもたちは何をしているかというと、部屋の中に閉じこもって、テレビゲームをしたり、インターネットをしたり、自然環境とのふれあいを少なく



炭谷 茂氏

あいが少なくなり、逆にバーチャルな世界が多くなっている。その両者があいまって、心の歪みが生じているのではないかという仮説を持っています。その心の歪みが、先ほど言ったような、いろいろな子どもたちをめぐる問題事例に現れているのではないかといった問題設定を持っています。

いずれにしろ自然環境とのふれあいは、子どもたちの心の発達に大変いい効果をもたらすと思います。少なくとも、副作用がないところが特色ではないかと思っています。やって、いいことはたくさんありそうだけれども、悪いことはない。

そういうことになれば、子どもたちの成長のために自然環境とのふれあいをもう少しやる必要があるのではないか。この部分は、保育園の先生自身も非常に悩んでいます。

そこで私は、現在の子どもの心の成長という面で、三つの提案をしてみました。一番目は、豊かな自然環境といかにふれあうかです。たとえばいまの子どもたちは樹木の名前も知らない。木登りをしたことがある子どもも少ない。それから星の名前を知らない。そもそも夜空の星を見たことがないという子どもが、現在、4分の1もいる。

これは単にふれあうというだけではなく、保育園の子どもでも、それを知識としてある程度身につけていく。

そういうものをうまく教える環境学習というものを、いまの保育園の先生で教えられる能力のある人は少ない。小学校、中学校にしても、教えられる能力のある人は少ない。総合的学習にしても、環境、福祉、国際貢献、国際交流を教えなさいといっているけれども、なかなか小学校の先生方は環境を教え難いと思

ます。

自然とのふれあいによって創造力が養成できるのではないかと思います。

自然を見ながら考えると新しい発明ができる。自然は創造力の源泉かなと思っています。

2番目は芸術、3番目は社会とのつながりです。特に子どもたちが孤立をしていることが原因だと思います。いかに社会とのつながりをやっていくか。こういうものの、社会との新しいつながりをいかにつくっていくかが重要だと思います。

以上、三つのが、いまの子どもたちの保育に大変欠けているのではないか。

この環境福祉学会のテーマに大変関係が深いですね。ですから環境福祉学の応用面として、保育所における環境をいかに利用して子どもたちの成長につなげていくか。そういう実践例が各地で出てくる、それがまとまって、できればさらに保育指針や幼稚園の指導要領などの改正に結びつけていくようなものをつくれればと思っています。



「社会的協同組合と家電リサイクル」

日本労働者協同組合連合会理事（障害者担当）
鈴木 晴彦氏

今日のテーマは「企業の視点から見た環境福祉」ということで、私どもは企業とは違う側面もあるので、最初に労働者協同組合というものについて触れていきたいと思えます。同組合は、働く者が仕事に必要な出資をして、経営も自分たちでやるということです。それからそこでの労働を自分たちが担うという組織です。

ただ残念ながら、日本には働くための協同組合がないという状況の中で、働くための協同組合をつくろうではないかというのが私どもの運動で、現在も日本労働者協同組合連合会というのは任意組織です。実際の事業についてはNPO法人、企業組合、社会福祉法人という法人の制度を使って仕事を行っているということです。「労働者協同組合は出資、労働、経営を組合員全員が三位一体のものとして担い合う日本で唯一の協同組合です」ということで、労働出資、経営との関係が整理されています。

現在の総事業費が213億、これは2006年なのでもう少し増えています、213億をだいたい1万人の組合員でもってやっているのが現状です。福祉あるいは環境などを中心にして、あらゆる仕事に携わっているととてもいいと思えます。

もう一つ、この中で私どもがこれから障害者の皆さんの就労を進めていくうえで重要な問題として、家電リサイクルの問題に積極的に取り組んでいます。

家電リサイクルについて言いますと、ブラウン管テレビ、洗濯機、冷蔵庫、クーラーの4品目は、特別の法律をつくらせてリサイクルすることになっています。

現在のところ約2300万台の家電が排出されてくる。それに対してメーカー系列で小売業者が引き取って、メーカーの指定工場で処理するのが6割強、650万台で、それからそこで処理されるのが1200万台です。それに対して、自治体が実際に受けているのは28万台で、それも自治体の委託業者を中心にして9万台が処理されているだけです。そのほかの600万台がどういふふう処理されているかわからない。

具体的に言うと、中国などに持ち出しているもの、リユースされているもの、あるいは日本の中で不法投棄ということで処理がきちっとされないものになっている。そのへんがわからない中で、いま経産省が中心になって家電リサイクル法の改正ということで検討を行っています。

ただ、この問題をもう少し基本的に考えると、障害者という人たちにとっても、対応のしやすい、非常に適した仕事になるのではないかとということです。それぞれの人たちが家電を手分解していくと、相当おもしろいことが出てきます。

たとえばリサイクル率ですが、いまメーカー系列では機械で壊すやり方を基本にしていますので、だいたい60%から、高くて70%くらいのリサイクル率です。しかし手



鈴木 晴彦氏

分解で細かくしていくと、98%くらいまで分解できます。

2番目には作業が比較的単純というか、一人の人が一つの家電を壊すわけですが、そういうかたちになると、自分でコントロールしながらできます。

それから初動設備が要らないというところについて言えば、極端に言えばドライバーが1本あればできる話ですから、そんなに資本を投入しなくてもできます。それから現在、非常に大きな問題となっているのは、分解後も、金属の価格が高騰していますから、それ自体でそれなりに仕事としてできるということがあるのではないかと。

もう一つは、どういう品目をどういふふう分解したかという報告の、きちっとした制度をつくられば、家電がどこへ行ってしまったかわからないということについても、明確にできる。そういうことから、それぞれの排出される地域を中心にして、こういう手分解の作業ができるようなところをつくって、大きな役割を果たす必要があるのではないかと。

たとえば中国に多くの家電が行っているわけですが、中国の安い賃金であれば、十分採算が合って仕事ができるということです。だから中国に持っていかなくても、日本の障害者あるいは高齢者の人たちがやるということであって、十分にできるわけですし、それを地域でやることで環境に非常にやさしいということが現実的にできるのではないかと。ということでもって、いま進めています。

それをすることになりますと、やはり家電リサイクルの問題は、採算が合うので企業でやるという側面があっていると思えますが、そうではなく、企業の社会的責任から言って、そういう一部分を障害者や高齢者に出していくというスタンスが整理されれば、非常に進んでいくのではないかと。

ただ残念ながら、私どもはメーカーの皆さんと連携をとるようなスタンスがなくて、それをいま模索しています。皆さんの中でそういう関係の方をご存じの方があれば、できればご紹介いただいて、そういうところと話ができるようにしていきたいというのが一つです。

いま私どもは三つの協同を大事にしています。一つは、その事業を利用する方との共同です、もう一つは働く者同士の協同、もう一つは地域との協同です。この三つの協同を徹底してやっていくことが、これからの社会の非常に大きな重要な役割だと思います。

「水のエネルギーからの発想」

株式会社澤本商事社長
澤本 三十四氏

当社は世界に1カ所しかない鉱物資源を持っています。天城抗火石と呼ばれる大変軽い石です。これはケイ酸マグネシウムのほうが多い。カルシウムではないので、石灰岩ではありません。全部ケイ素で、伊豆のほうにあります。

これを昭和42年から研究しているわけですが、最初に研究したのは、環境の中で一番難しいものを処理ができないものということで、牛の尿尿が水処理に取り組みました。それで発明大賞、考案功労賞までいただいたわけですが、結果が先に出て、後にメカニズムが解明されてきました。抗火石に反応した水は、比重が1.002となり、細胞内に浸透するエネルギーが強く、防カビ、防錆、殺菌などの効果が判明しておりますので、その実証例のいくつかを紹介します。

精神病院での水中毒対策に利用したケースです。水中毒は、過剰の水分摂取により低ナトリウム血しょうを基盤とした病態で、疲労感、頭痛、嘔吐、痙攣・昏睡、性格変化などの症状起こします。治療は水制限が主で、薬物療法は確立されていません。

富山の小矢部にある松岡病院さんのほうへ、炭谷先生にご一緒いただきまして、事務長さんといろいろ懇談してわかったことですが、約3年間、この石の中を通った水を飲んでいました精神病の方がだいたい100人いると、L5~1.6人の割合で水中毒患者が出ますが、それが3年ゼロです。

水中毒患者になると大変むごたらしいもので、完全に鉄条網を張られて、その中へ閉じこめられて、回復するまで出されない。監獄へ入ったような状況に追い込まれます。

見ていても、あまりいいものではありません。看護師や先生はえらい目に遭うわけです。

それで院長先生は13年間、一切家には帰れなかった。この水を飲んで、だんだん安定してきて、1年半ほど経ったら、週に二、三回、家に帰れるようになったというエピソードがあります。それから看護婦さん等も大変お楽になって、逆に病院だけではなく、デイケアも運営するようになったというのが実情です。

病気に対してそういうおもしろい結果が出ていて、なぜそうなったかということの花沢先生に頼んで、ちょうど摂南大学の宮田先生をご紹介いただいて、お願いして水を分析しています。

いまこちらが考えているのは、いいエネルギーを持った水を飲むと、細胞からミトコンドリアのほうへ送られて、そこへATP、人間の生命体をつくっていくわけです。その生命体をつくるときに、大変いいものができてくるのではないか。いい酵素ができるのではないかとということも



澤本 三十四氏

で、いまわかってきているわけですが、あとは大学のほうに任せていこうと思っています。

次にいま大変問題になっているレジオネラ菌対策の応用例です。老人福祉のほうで入浴したときに、レジオネラが一番怖い問題です。いま佐渡のホテルでレジオネラが2件発生して、入浴は禁止されています。お風呂に入れないのだから、ホテルにならない。レジオネラで死人もたくさん出ていますが、そういう問題が出ています。

いま日本の行政では、次亜塩素酸ソーダを入れれば全部死ぬと言っていますが、実際、そう簡単にレジオネラは死にません。塩素が0.4~0.5ppm入っていると、レジオネラは全部、どんどん増えていました。

レジオネラはpHを3以下にすれば死んでしまいます。しかしpH3のところへ人間は入ってられません。そこでやはりレジオネラ対策ということが叫ばれてきたわけです。レジオネラ対策で実際のデータを持っている企業は日本にはありません。当社は、ある一つをやって6カ月なら6カ月、3年なら3年のデータを出しています。たとえば福井県の「きららの家」などは2年少し経ちますが、ずっとゼロです。入浴施設で「レジオネラ菌を測って、レジオネラ対策をやっていきます」と窓に貼ってありますが、一番危ないのはそれです。なぜかという、お風呂を空にして、全部洗って、清掃して、新しい水を張った、その水でレジオネラ検査する。だからいないのは当たり前です。

当社はそうでなく、土日使って月曜日の朝、その水で全部データをとっています。そういうところはありません。こういうものは国のほうで変えていってもらわないと、全部抜けているわけです。危ないので、レジオネラに対しては大変気をつけてもらいたいと思います。

次に省エネルギー対策への応用例を紹介します。水の中で一番エネルギーを持った水というのは育成光線を持った水です。要するに4~14ミクロンは育成光線と言われており、その波長をうまく使って、油と水を混合するエマルジョン燃料を開発しました。この他、ボイラーの配管内のスケール除去や自動車排ガスのCO₂・NO_x削減効果、コンクリート活性、カプトガニ、蛭飼育などへの応用例も検証されております。

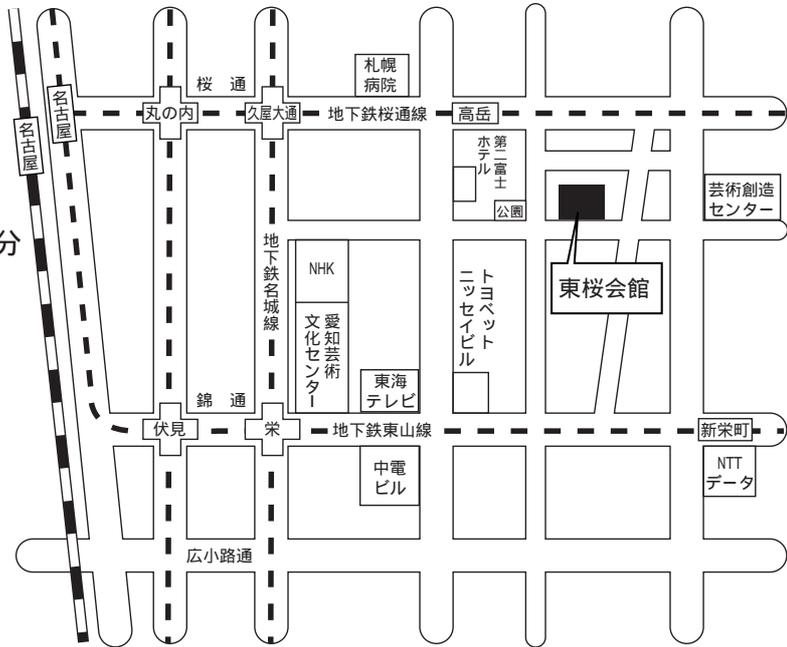
第3回年次大会会場案内

中部電力東桜会館

〒461-0005
 名古屋市東区東桜2-6-30
 TEL 052-973-2223
 地下鉄桜通線「高岳駅」下車5分

大会実行委員会事務局

〒488-8711
 尾張旭市新居町3255-5
 名古屋産業大学総務課
 TEL 0561-55-5101
 FAX 0561-52-0515
 E-Mail: t-ito@nagoya-su.ac.jp



環境福祉学会第3回大会（名古屋）の情報は、学会ホームページに掲載されております。

環境福祉学会

検索

環境福祉学会組織及び役員一覧

会 長	江草 安彦	社会福祉法人旭川荘名誉理事長 / 川崎医療福祉大学名誉学長
副 会 長	鴨下 重彦	東京大学名誉教授 / 国立国際医療センター名誉総長
	炭谷 茂	前環境事務次官 / (財)休暇村協会理事長
	堀越 哲二	堀越学園理事長 / 創造学園大学学長
	伊藤 達雄	社団法人環境創造研究センター理事長 / 名古屋産業大学名誉学長
理 事	松寿 庶	社会福祉法人全国社会福祉協議会常務理事
	波田 幸夫	環境新聞社会長
	長田 逸平	社団法人日本経済団体連合会事務総長付
	藤田 八暉	久留米大学教授
	土井 康晴	社団法人生活福祉研究機構専務理事
	泉谷 直木	アサヒビール株式会社常務取締役
	安川 緑	金沢大学大学院医学系研究科准教授
	児玉 剛則	社団法人環境創造研究センター専務理事
	寺田 清美	東京成徳短期大学教授
監 事	永井 伸一	獨協中学・高等学校校長 / 獨協医科大学名誉教授
	平野 寛	杏林大学名誉教授
事 務 局	小内 栄	創造学園大学事務長
	小峰 且也	環境新聞社取締役
	酒井 剛	環境新聞社広告・事業担当次長
	王 豊	創造学園大学東京本部所長

事務局 だより

事務局の前の有栖川宮公園は、都心の四季を感じさせてくれます。色を変える樹々は、ビル群の花瓶に添えられた草木のようにも見えますが、しっかりと根を張った樹々の力強さも感じます。都会の「癒しの空間」という言葉が最も相応しいかもしれません。耳を澄ませば、野鳥のさえずりも聞こえ、わずかですが空気も甘く感じられます。老夫婦が孫と公園を散歩する光景は、まさしく「幸福」そのものです。

さて、名古屋で開催される第3回大会は「環境福祉のまちづくり」がテーマです。多くの参加者と「環境と福祉の実践」について語り合ひましょう。